

フィクション劇場 第十八話「忘却」



フ
ィ
ク
シ
ョ
ン
劇
場

第
十
八
話

「
忘
却
」

大
太

大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます。
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑問に思っていることなどに対して、「もし、こういう設定や条件になったら、当事者たちはどう動くのか」を考えたオムニバスドラマです。フィルム・バイヤーさんではドラマ部門に全二十五話をまとめて公開しており、それと同様に完全著作権フリーですので、詳細はそちらをご覧ください。マスメディアに少々風が向いている「性根の曲がった社会派ドラマ」で、この第十八話は、最近話題の新聞関係を扱った話で、第十九話と連続しています。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第十八話「忘却」

【登場人物】

青葉海（あおは・かい）（25／63）：区切りを変えて「あお・はかい」と読む事ができ、それが犯行時の名前「Blue

Crusher（ブルークラッシャー）」の由来になっている

青葉空（あおは・そら）（22）：海の妹

佐藤正弘（さとう・まさひろ）（24）：空の彼氏

大東博也（だいとう・ひろや）（26）：毎朝新聞記者。米子支局勤務。青葉に襲撃され殺害される

鹿野勉（かの・つとむ）（26／64）：同所勤務。大東の同期。大東襲撃時の第一発見者

京田剛志（きょうだ・たけし）（30）：鹿野の後輩記者

フィクション劇場 第十八話「忘却」

坪倉 千春（つぼくら・ちはる）（22）…空
の会社の同僚。親友

丸山 桜（まるやま・さくら）（23）…空の
会社の同僚

塚口 佐代子（つかぐち・さよこ）（28）…
同右

ドクター

看護師

電話応対（声のみ）

家人 1

家人 2

家人 3

青羽 空（あおは・そら）（22）…空に間違
えられた女性

掃除のおばちゃん

【あらすじ】

1987年（昭和62年）、技術者の青葉海と、OLの空のきょうだいは二人で暮らしており、空には恋人の佐藤正弘がいる。

ある日、空は佐藤の両親に挨拶に行く日に体調を壊し、キャンセルする。

しかし、翌日の新聞に別人の名前が空と誤植される。訂正記事が出たが、佐藤は信じずに激怒し、空と別れる。精神的に落ち込んだ空は拒食症になり、それが原因で病死する。

海は空の復讐のため、記事を書いた記者が毎朝新聞の大東博也だと突き止め、ペンを突き刺して殺害する。同期の記者、鹿野勉は大東を発見するが、既に息絶えていた。

38年後の2025年、事件は既に時効となっており、逃げ切った海は、毎朝新聞の掃除アルバイトとして働いていた。

海は、毎朝新聞の献花台にある大東の遺影に、大東自身が時効後も、このような形になることを望んでいたのか問いかける。

○青葉の自宅（朝）

T『1987年（昭和62年）9月』

青葉空「海兄ちゃん、早く！ 会社遅刻しち

やうよ」

青葉海「もうちょっと待って！」

空「もう……」

二人は玄関を出て、歩く。

海「空、仕事には慣れたか？」

空「まあ、研修は一通り終わったんだけど。

うーん……よく分からない」

海「分からないって？」

空「うん。何か、男の人も女の人も同じように働けるようにしようって話になってるみたいなんだけど……あんまり変わってないみたいな感じ。まあ、普通のOLだね」

海「そっか」

空「海兄ちゃんはどう？ どんなことしてるの？ 家じゃあんまり話しないから」

海「今年から、携帯電話の開発してるよ」

空「携帯電話って、持ち運び出来る電話って

ヤツ？」

海「そう」

空「そう言えば、この前友達が、税務署の職員が主役の映画でそういうの見たって言うてたな……。カバンみたいなのだったって」

海「あ、それは、正確にはシヨルダーホンだな」

空「海兄ちゃんが、作ってるのと違うの？」

海「電話がかけられるってことは一緒なんだけど、今、出てるのはもっと小さくなってる。普通の受話器の3倍くらいの厚みだね」

空「そうなんだ」

海「それで、今度は受話器より小さいのを作ろうってことになってて」

空「そんな話があるんだ……。確かに、どこでも電話が出来れば便利だろうね」

海「そうだろうけど、まあ、こういう電話は保証金とか通話料とか、もろもろ高いからね。空の言ってた映画じゃないけど、役所

関係とか、金持ちとかが使ってるだけだよ。普段はあんまり見ないから、空が分からないのも無理ないな」

空は少し、俯く。

空「：それで：さ、話は変わるんだけど：、今度、海兄ちゃんに紹介したい人が居てさ：」

海「おっ、空もそういう年になったか。いいじゃないか。いつ見せてくれるんだ？」

空は、海の腰を叩く。

空「海兄ちゃん！ 見せモノじゃないんだよ!?」

海「ごめんごめん。で、いつ？」

空「一応、向こうのご両親に挨拶してから、と思っでて：」

海「順番としてはそうなるか：。父さん母さんにも紹介して欲しかったけど：」

空「うん：。あの事故がなかったらね」

海「まあ、こればかりは仕方ない。日にちが決まったら教えてよ。ちゃぶ台用意しと

くから」

空は、再び海の腰を叩く。

空「海兄ちゃん、まだそういうのじゃないよ！」

海「冗談だよ」

空「もうっ！」

歩いて、バス停に着く。

海「じゃ、オレは電車だから」

空「気をつけてね」

海は駅に向かって歩いていく。

○空のオフィス（朝）

空「おはよう」

丸山 桜・塚口 佐代子「おはよう、空」

丸山「ねえねえ、空。今度、彼氏の両親と会うってホント？」

空は坪倉千春の方を向いて、

空「えっ!?　もしかして千春、みんなに話したの!？」

坪倉千春「い、いや、空の話をしてて、はず

みでさ…」

空「ちよっと！ 千春なら口硬いと思って話したのに！」

塚口「まあ、いいじゃない…。それでいつなの？」

空は、塚口のを睨んで、

空「佐代ちゃん、ホントに言わせる気？」

丸山「まあまあ。私らだって空のこと応援してるだからさ。んで、いつ？」

空「…今度の…、土曜日」

塚口「じゃ、来週、『彼氏のご両親と私』っ

てタイトルでレポート3枚よろしく！」

空「だから、やめてよ！」

坪倉「空…、真面目な話、お兄さんも気にしてるんじゃないかな。身内は空だけだし」

空「うん。そうだね。いとは何人か居るけど…」

坪倉「ま、空の様子を見るとヘマはしなさそうだから、無理せず頑張ってきたよ」

空「ありがとう、千春」

○その週の土曜日・青葉の自宅（朝）

海「空、オレ会社の用事に駆り出されてるん

で、今から出かせなきゃいけないだけ

ど、調子悪いのか？ パスした方がいい

か？」

空「うん、行ってきた。私は大丈夫だから

：

海「無理しないで、ゆっくり休んでろよ」

空「うん」

空が電話をかける。

空「正弘くん？ 私。今日凄く調子悪くて

：。うん。せっかくお願いしたのに：。ご

めん：。ありがとう。じゃあね」

○空のオフィス（週明け…朝）

空が暗い顔で出社する。

空「おはよう」

坪倉「空、ちよっと！ 土曜日大丈夫だったの？」

空「千春、知ってるの？」

坪倉「知ってるも何も、あんた音楽イベント行ってたでしょ？ 彼氏のところに行くんじゃないかったの？」

空「えっ？ 私、土曜日は調子が悪いから家で休んでたんだよ？ 向こうにもちゃんと電話したし」

坪倉「それじゃあ、これは何？ 家のヤツ持ってきたんだけど」

坪倉は新聞を取り出し、ある記事を指差す。

坪倉「この記事よ」

新聞には、「若者のバンド熱 到来。各地で自主コンサート」の見出し。その中のインタビューに、「東京都桐山市の青葉 空さん（22）のコメントとして、「最高です。日頃の鬱憤を晴らすのに持ってこい。また来たい」とある。

空「何これ!? 私、そんなイベント行ってな

い。これ間違ってるよ」

坪倉「でも、新聞だよ？」

空「新聞でも違う！ 今日、早退して電話してみる」

○青葉の自宅（昼）

空は、千春からもらった新聞を持って
いる。

空「毎朝新聞さんですか？ 私、青葉 空と
言います。そちらの新聞に載っている記事
に私の名前が載っているんですが、覚えが
なくて……。はい、では折り返しでお願い
します」

空は居間で待つ。

電話が鳴る。

空「はい。確認できたんですね。明日です
か。はい。よろしく願いします」

胸を撫で下ろす空。

空は居間に戻ろうとした時、また電話
が鳴る。

空 M 「まだ、何かあるのかな？」

空 「はい、青葉です」

佐藤 正宏（声）「空か？」

空 「正弘くん。そうだ、言わなきゃいけないことがあって：」

佐藤（声）「新聞見たぞ、空！ この前ウチに来れなくなったの、コンサートに行ってたからなのか！」

空 「正弘くん、ちょっと待って！ あれは間違いで、今、新聞社の方に連絡したばかりで：」

佐藤（声）「新聞が間違える訳ないだろ！ それに、あの日が大事な日だってことは空も分かってたろ？ ウチの親もその記事知ってるんだぞ！ どうするんだ！」

空 「どうするって言っても：」

佐藤（声）「毎日ストレスが溜まってたとか書いてあったな？ そんなにオレといのが嫌なのか？」

空 「正弘くん！ 私の話も聞いて！」

佐藤（声）「もういい！ 金輪際連絡しないでくれ！」

電話が切られる。

空「正弘くん……」

○空のオフィス・翌々日（火曜日…朝）

空が落ち込んで、仕事が手につかない。
い。

坪倉「空、訂正記事見たよ……。ごめんね」

空「ううん、分かってもらえればいいの……」

坪倉「あれから、彼氏から何か連絡あった

の？」

空「……ない……」

坪倉「そっか……。でも見てるはずだよね？」

空「分かんない……。だって凄く小さいんだも

ん」

坪倉「早く、誤解が解けるといいね……」

空「千春ちゃん……。ありがと……」

課長が近づいてくる。

それを見て、坪倉はそそくさとその場

を立ち去る。

坪倉「じゃ」

坪倉は空の席から離れる。

課長が近寄ってくる。

課長「青葉くん、仕事が進んでいないようだけど……」

空「すいません、課長。頑張ってはいるんですが……」

課長「そうか」

課長が空の席から離れながら、小声で、

課長「ま、彼氏にふられたくらいで仕事ができなくなるようじゃあな。やっぱり女の子に仕事を任せるのは無理か……」

空の背中が丸くなる。

○青葉の自宅・次の土曜日（昼）

坪倉が呼び鈴を鳴らす。

海「はい」

海が玄関を開ける。

坪倉がお見舞いの花を持って立っている。

海「どちら様ですか？」

坪倉「空の会社の同期で坪倉と申します。空のお見舞いに：」

海「それは、ありがとうございます。空の兄で海といいます。どうぞ」

坪倉「失礼します」

二人は階段を2階に上がっていきながら、

坪倉「空の様子はですか？　ずっと会社を休んでいるので：」

海「正直、良くないです。というか悪いです。部屋にこもってて：。食事も口クに食べないですし：。それに：、何も話してくれないので：」

坪倉「：やっぱり、アレが原因なのかな：？」

海「坪倉さん、アレというのは？」

坪倉「実は：」

×

×

×

海「そうなんですね。そんなことが……」

坪倉「ご存じなかったんですか？」

海「はい。その日は空は体調が悪くって、電話でその旨、向こうに連絡したと聞いてましたから……。そういうことになっていたんですね……」

坪倉「はい」

海「次の日、空がうかない顔をしてたので、どうなのかな？　とは思いましたが……。でも、きょうだいとは言え、二人ともいい大人ですから……。それで？」

坪倉「訂正記事は確かに載っていました。小さかったですけど」

海が空の部屋のドアをノックする。

海「空、会社の人がお見舞いに来てくれたよ。坪倉さんって人」

空はクッションをギュツとして、

空 M「千春ちゃん……」

空「帰ってもらって」

坪倉「空、千春だよ。少しでいいから顔見せてよ」

空「帰って！」

海・坪倉「！」

二人は引き下がる。

階段を降りて、玄関。

海「：すみません、せっかく来てもらったのに：」

坪倉「私のことは気にしないで下さい。それより空はずっとこんな感じなのですか？」

海「はい。ただ、ウチは両親がいなくて、私も仕事があるので、ずっとつききりという訳にも行かなくて：。正直どうしたらいいのか分からないんです」

坪倉「そうなんですネ：。もし、私で力になれることがあったら言って下さい」

海「はい。ご心配をおかけします」

坪倉「また、少し空けてきますね」

海「ありがとうございます」

○青葉の自宅（1週間後くらいの休日…昼）

空の部屋のドアの前。

海「空、ご飯持って来たよ。もう1週間くら

いろくに食べてないだろ？ 体に悪いよ。

食べたくなかったらお風呂に入ったら？

さっぱりしたら気分も良くなるよ」

返事がない。

海「空、いるんだろ？」

返事がない。

海「空、入るぞ」

海はそっとドアを開けて部屋の中を見る。
カーテンが閉めてあって薄暗い。

空が壁に寄りかかるようにして気を失っている。

海は空の肩を持って前後に揺さぶる。

海「空！ 大丈夫か!? 空！」

空の意識が戻らない。

海はハッとして、両腕の手首の内側を見る。

海は、階段を降りて、電話へ向かう。

海は119番を回す。

海「もしもし！ 救急車をお願いします！」

○病院（昼）

空は点滴を受けながらベッドに寝ている。

海はそばで付き添っている。

そこにドクターが近寄る。

ドクター「お兄さん、ちょっとよろしいですか？」

ドクターと海は病室を出る。

× × ×

海「拒食症？」

ドクター「はい。どうやらそのようです」

海「あまり聞かない名前ですが……」

ドクター「ええ。最近、海外の有名グループの方がかかっています、一般にはあまり知られていません」

海「どうすれば治るのですか？」

ドクター「この病気は心理的ストレスが原因となるケースが多いんです。何か心当たりはありますか？」

海「…ええ…、ありますが…」

ドクター「でしたら、そのストレスを解消すること、回復するかも知れません」

海「でも先生、そのストレスは過去のトラウマのようなものです。取り除くことは難しいんじゃないかと…」

ドクター「そうですね、精神科での治療が必要かも知れません」

海は少し驚く。

海「精神科…、ですか？ でもそれは…」

ドクター「おっしゃりたいことは分かります。ですが、この病気は内科的・外科的な治療では回復しません。私どもの病院には精神科がありませんので、専門の病院に転院して頂くことになります」

海「…」

ドクター「今は、点滴で栄養分を補給してい

ますが、とにかく妹さんの体力回復が第一です。その後、どういう治療を行うかについて、考えておいて下さい」

海「…はい」

海は病室の空を見る。

海「…」

○青葉の自宅（次の休日…昼）

電話が鳴る。

海「はい、青葉です」

海「何ですって!? 今すぐ向かいます!」

海は外に飛び出す。

天気は晴れている。

○病院（昼）

海が病院の玄関に入る。

海が病院の廊下を走る。

海が空の病室に入る。

ドクターと看護師がいる。

空の顔に白い布が被せてある。

海「!?」

ドクター「先ほど、息を引き取りました。病名は急性心不全です」

海は拳を握りしめる。

海「…」

○同所（電話の前）

天気は雨に変わっている。

海は電話をかける。

海「もしもし、坪倉さんのお宅ですか？

私、青葉 海と申します。千春さんをお願い

いしたいのですが…」

× × ×

海「もしもし、青葉です。お久しぶりです」

海は雨の天気窓を見ながら、

海「…空が…、なくなりました…」

海はまだ雨空を見つめている。

海「以前、新聞記事の話をされていましたよね？ 詳しく教えて頂けませんか？」

○青葉の自宅（昼）

海が新聞社に電話をかける。

電話応対（声）「もしもし、こちら毎朝新聞です」

海「もしもし、私は青葉海と申します。そちらに掲載された記事についてお伺いしたいのですが…」

× × ×

海「えっ？ 教えられない？」

電話応対（声）「はい。誰がその記事を書いたかについてはお答えできません」

海「しかし、先ほどお話ししましたように、

この記事が原因で、私の妹は…」

電話応対（声）「妹さんのことについては、お悔やみ申し上げます。ですが、弊社の記事との関係が不明ですので、こちらとしてはご対応致しかねます。では、失礼します」

電話応対は電話を切る。

海の受話器からツーツー音が鳴る。

海、怒りの表情。

海 M「教えてくれないのなら…、自分で探す
だけだっ！」

○青葉の自宅（ハローページ…昼）

海は居間のテーブルでハローページを
めくる。

海「坪倉さんは漢字が鳥の “羽” に訂正さ
れたと言ってた。その名前の人が取材を受
けてるはずだ」

海はハローページを指でなぞり、何人
かの「青羽」を探し当てる。

○『青羽』探し その1（夜）

海が、一人目の「青羽」に電話をかけ
る。

家人1（声）「はい、青羽です」

海「すいません、そちらに『空』さんという
方がいらっしゃいますか？」

家人1（声）「…失礼ですが、あなた、どな

たですか？」

海「いろいろと調査をしております：」

家人1（声）「すいませんですが、お答えできません。失礼します」

家人1は電話を切る。

海「：」

×

×

×

○『青羽』探し その2（夜）

海が二人目の「青羽」に電話をかける。

家人2（声）「はい」

海「こちらのお宅に『空』さんという方はいらっしゃるますか？」

家人2（声）「いませんですが、あなたどなたですか？」

海「いえ、人を探していました：」

家人2（声）「人探しでしたら、警察に行かれてはいかがですか？ 失礼します」

海「：」

海、考える。

×

×

×

○『青羽』探し その3（夜）

海、三人目の「青羽」に電話をかけ

る。

家人3（声）「はい。どなたですか？」

海「毎朝新聞の木村と申します。先般、記事にさせて頂いた方にもう一度取材をしたいのですが、住所が分からず困っていました。こちらに『空』さんという方いらっしゃいますでしょうか？」

家人3（声）「あら、記者さんも大変です

ね。すいませんが、ウチにはおりませんよ」

海「ありがとうございます。お時間を頂戴してすみません」

家人3（声）「いえいえ、頑張ってくださいね」

海「はい。ありがとうございます」

×

×

×

○『青羽』探し その4（夜）

海、四人目の「青羽」に電話をかける。

×

×

×

海「あなたが、『青羽 空』さんですか？」

青羽空（声）「はい、そうですが…」

海「いやあ、探しました。私の上司から、も

う一度取材してくれって言われまして」

青羽（声）「そうなんですね、お手間をおかけしました」

海「いえいえ。ところで、当日取材に行った者の名前は分かりますか？」

（青羽の家）

青羽は不思議そうな顔をする。

青羽「確か、大東さんとおっしゃってたと思いますけど…」

（青葉の家）

海「大東ですね？ こいつは取材メモとかをすぐなくすヤツで、困ったもんです。取材の方は大東の担当なので、折り返しそちらによこします。それでは失礼します」

海は電話を切る。

（青羽の家）

青羽「…？　今、自分で取材したらいいのに
…」

○青葉の自宅（夜）

海が、ハローページをめくる。

海「今度は『だいとう』だ！」

「だいとう」をリストアップする。

○大東の自宅（早朝）

海が大東の家を見上げる。

海「ここがヤツの住んでいるところか…」

海は隠れている。

大東が家を出て、海は後を付ける。

大東が「毎朝新聞　米子支局」のビル
に入っていく。

海「…」

○毎朝新聞　米子支局（その日の夜）

海はサングラスにマスク目差し帽、手袋で、米子支局に入っていく。

海は、階段を登って、支局にたどり着く。

海は支局のドアの窓から部屋の中を見る。

居るのは大東一人。

海はドアをノックして、開ける。

海「すいません、こちらに大東さんという方はいらっしゃいますか？」

大東「はい。私が大東ですが：、何かご用ですか？」

海「：ええ、：おお有りますよ：」

大東「？」

海は大東に飛び掛かり、床に仰向けにさせる。

大東は抵抗するが、海が抑える。

大東「な、何をするんですか!？」

海はペンを取り出し、握って振り上げる。

海、語りかけるように、

海「…あなたに、一文字の間違いというものが、どれだけ人の人生を狂わすのか…、教えてあげますよ！」

海は大東の胸を一突きする。

大東「ぐぁー！」

大東は絶命する。

海は、はぁはぁと息をする。

海は「ペンは剣より強し Blue

Crasher」のメッセージカードを大東の上におく。

海は部屋を後にする。

× × ×

鹿野勉が支局に戻ってくる。

鹿野は支局のドアを開ける。

鹿野「戻ったぞ、大東。…まったく夜遅くのネタ取りも大変だよ」

鹿野は大東が倒れているところを見つける。

大東の体を揺らしながら、

鹿野「おい！ 大東!? どうした！ しっかりしろ！」

鹿野はメッセージカードを見る。

鹿野は怒りに震える。

鹿野は大東の胸に刺さったペンを見て、鹿野は再び、怒りに震える。

○ホール（社葬）（昼）

読経が流れる中、参列者が焼香している。

鹿野の番になり、大東の遺影を見上げた後、焼香して、お辞儀をする。

頭を上げている時に、現在（2025年）の白髪の鹿野とオーバーラップ。

○現在・大東の献花台（昼）

白いテントの下に、簡素な大東の献花台。

大東の遺影があり、周りに花が飾られている。その前の机にも花が手向けら

れている。

鹿野と京田剛志が献花台の前。

鹿野は喪服。

京田「…もう…、40年近く前になるんですね…」

鹿野「記者が曖昧な事を言うな。38年だ」

京田「すいません…」

京田「ところで、鹿野さんはこの日だけは、きちんとした服なんですネ」

鹿野「ああ。こいつが見たら、『外回りするのに、その格好はなんだ？』ってどやされそうだな…」

京田「結局、逮捕状も出なかったから指名手配にもならず、時効…、なんですよね」

鹿野「そうだ。15年だった時効が、25年になって、今では廃止されてるがな」

京田「後、1年遅かったら…」

鹿野「バカ言うな。100年遅くても、早いくらいだ」

京田「…」

京田「鹿野さんは、この事件の特別取材チームにいたんですよね？」

鹿野「ああ。オレの同僚だったし、なりより第一発見者だったからな」

京田「大変だったんですか？」

鹿野「大変だったよ」

京田「ずっと、事件を追っていたからですか？」

鹿野「それは少し違う」

京田「？」

鹿野「京田。お前、記者ってのは、何をする人間が分かっているか？」

京田「もちろんです。取材をして、それを記事にする人間です。当たり前じゃないですか」

鹿野「その通りだ。でも、このチームでは、それが出来なかったんだ」

京田「どういうことですか？」

鹿野「この事件は、大東個人をターゲットにしたものなのか、それともウチの会社をタ

ーゲットにしたものか、分からなかったからだ」

京田「当時の紙面を見たことがあります、そうみたいです。それが？」

鹿野「普通なら、警察が事件を捜査する。そして、オレたちは警察に取材して、それを記事にする。：だが、もし会社をターゲットにしたものとしたら、オレたちは警察に捜査される側であり、かつ、警察を取材する側にもなる。つまり、両方の立場になる」

京田「確かに：」

鹿野「だが、マスコミは『情報源の秘匿』を守るが大前提だ。だからウチの取材で得られた情報を警察に渡す場合にも、当然それが必要になる。その匙加減が難しかったんだよ」

京田「社内でそんな事があったんですね：」

鹿野「ああ。こういう場合、オレたちの調べたことは証拠にもなり得るから、表に出す

ことには慎重にならざるを得ない。つまり、記者として取材をしても、記事を書けないこともあったってことだ」

京田「それが、『違う大変さ』、だったと？」

鹿野「ああ。大変というよりジレンマだな。

記者としての：」

少し、間。

鹿野「ところで京田。この事件の初報を読んで、何か感じなかったか？」

京田「そう：、ですね、なんか曖昧だった感じがします。凶器は『鋭利なもの』だけでしたし、犯人は『ブルークラッシャー』として書いてなくて、どういう形でそれが分かったのかとか。普通そういうのは、記事になるんじゃないかと思うのですが：」

鹿野「そうだ。そういうところが記事に出来なかったってことなんだよ」

京田「：」

鹿野「：凶器はペンだった。それで胸を一突きだ」

京田「…」

鹿野「…そして、『ブルークラッシャー』

は、現場で見つかったメッセージカードに
書いてあった」

京田「…」

鹿野「…そして、メッセージカードには、こ
うも書かれてあった」

鹿野は語気を強めて、

鹿野「…『ペンは剣よりも強し』ってな」

京田「…」

鹿野「これは、オレたちに対する侮辱以外の
何ものでもない。嘲笑以外の何者でもな
い。挑戦だ。その時、オレは怒髪天の意味
が初めて分かったよ…」

京田「…まだ、その取材チームがありますよ
ね？」

鹿野「ああ。オレはチームから離れている
し、もうすぐ定年だ。だが、この事件の真
相を明らかにすることは、大東への弔い
だ。そして、暴力で言論の自由を攻撃する

輩への鉄槌だ。必ず真実を暴いて見せる」

京田「…」

鹿野と京田は献花台を後にする。

○献花台（海）

その後、掃除のおじさん（海）とおばちゃんがバケツとモップを持って、掃除にやってきた。

大東の遺影を見る海。

海 M「…あんだ…、幸せか？」

海は、目を伏せながら、

海「ふっ…、殺されて幸せな訳ないよな…」

海 M「…でも、毎年こうして、あんたを思い出して、手を合わせてくれる人がたくさんいる…」

海 M「多分…、これからもずっとそうなんだろうな…。例えば、100年経っても…」

海 M「…そして…、あんだが殺された、そのことだけが残っていく…」

海 M「あんだが犯した…、小さなミスのこと

は忘れ去られてな……」

少し。間。

海 M「……あんだ、記者なんだよな。取材して、ペンで記事を書く……」

海 M「オレも、昔はペンを使ってたよ……」

海 M「……一度だけ……、違う持ち方をしたけどな……」

少し。間。

海 M「今は、誰でもペンが持てる世の中になった……」

海 M「時々、画面に向かってペンを使ってるヤツらを見るよ。オレの一度だけの持ち方と同じ……、見えないペンをな……」

海 M「……そういうのを知らないで済んだのは、良かったのかも知れないな……」

少し。間。

海 M「……なあ……、これはあんだが望んだことなのか？」

海 M「こうやって……、何かの象徴になるってことが……」

海 M「もし…、今、犯人が見つかったら…、
あんたの仲間たちは、どうするんだろうな
…」

海は大東の遺影を見ながら、しばし佇
む。

おばちゃん（声）「青葉（あおば）ちゃん、
何、ぼおっとしてるんだい？ 早く掃除に
行かない、日が暮れちゃうよ」

海は、おばちゃんの方を振り返る。

海「おばちゃん、また名前間違えてますよ。
私は、青い葉っぱと書いて『あおは』、下
の名前は『海（うみ）』と書いて『かい』。
『あおは・かい』ですよ。

おばちゃん「はいはい。じゃあ海（うみ）ち
ゃんいくよ」

海「もう…、ちゃんと覚えて下さいよ…」

海は大東の遺影を横目で見て、おばち
ゃんの方に向かっていく。

E
N
D

フィクション劇場 第十八話「忘却」

(2025年9月4日 単話アップ)
(2025年6月15日 初出)